

最後まで人間としての尊厳を失わない、 村づくりへの思いをかけた9年間のがんばり

ニコニコ生活村（大分県三重町）

尾崎 正利

(よかネットNO.34 1998.7)

－ 1 地域産業

昨年、福岡県高齢者協同組合が主宰する「食・農・命のシンポジウム」の実行委員として運営のお手伝いをした折に、診療所、デイケア、老健施設、高齢者住宅、農園、工房など、生活と医療・保健が近接して立地した「ニコニコ生活村」（大分県大野郡三重町）の話を知り、強く興味をひかれた。「高齢者が最後まで生きがいを失わない村づくり」「命が大切にされる場づくり」という村のテーマが本当に実践されているような感じだった。今回、現地に行き、村づくりに携わってこられた杉谷岩彌さん（医療法人ニコニコ診療所専務理事）にお話を聞くことができたが、お話を聞くうちに、係わってこられた人々の思いでここまでやれるものか、と大いに勇気づけられた。

9年間で170人の雇用を創出。すべての施設が村の賑わいづくりに貢献

まず始めに話を聞いて驚いたのは、ニコニコ生活村は、わずか9年間の活動で170人を雇用する、三重町で二番目に大きな職場になっていることだった。

大きな病院一つ、工場一つ誘致すれば、雇用と

いう点で見れば、確かに同程度の雇用効果は得られるかもしれない。しかし、こちらの村には医療・住まい・職場・農作業・保健福祉・食事サービスといった多様な要素があり、それぞれの機能が村の賑わいづくりに貢献している。

ちなみに170人の雇用を生み出したニコニコ生活村にはどんな施設があるのかみてみたい。（図表2）

これだけの施設を作り上げて活動させてきた9年間のタイムスケジュールを、頂いた資料を参考に整理すると次頁図表3のようになる。

かなり短期集中型の取り組みである。なぜ、これほどの早さでやってこれたのか。

以下の話は、杉谷さんからお話を聞くうちに、最も強く心をひかれた点をまとめたものである。

肉親の死が「最期まで人間としての尊厳を失わない村づくり」を考えるきっかけに

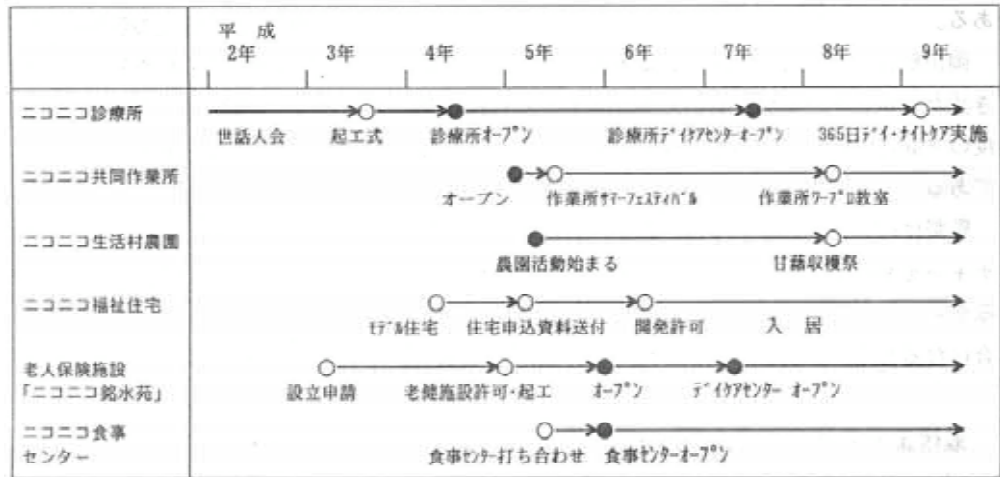
ニコニコ生活村の村づくりのきっかけは、約17年ほど前にさかのぼる。杉谷さんが自治体職員として働いておられた昭和56年頃、公私ともに親しかった辛島先生（三重病院の医師）との酒飲みの



図表1
ニコニコ生活村は大分県三重町にあり、大分市から車で1時間

1. ニコニコ診療所(平成4年8月オープン) ・11の診療科、労災・生活保護・原爆医療の医療体制、リハビリセンター、デイケアセンター、鍼灸室 ・平成9年から365日のデイ・ナイトケアを開始
2. ニコニコ共同作業所(平成5年1月オープン) ・社会福祉法人の共同作業所で、現在、10人の知的障害者が通所で作業している ・パン製造、味噌、紙すきなどを手がけ、老健施設「銘水苑」入所者肌着の洗濯作業も行う
3. ニコニコ生活村農園(平成5年5月オープン)
4. ニコニコ福祉住宅(平成5年6月開発許可) ・福祉住宅で有事の際にニコニコ診療所から医師が駆けつける。診療所とはベルでつながる ・分譲地は土地50坪、建坪20坪の平屋住宅(土地500万円、建物1300万円)、26区画は完売・賃貸は自立生活可能なお年寄り向けが3.5万円/月、365日 3食の配食つきが7.5万円/月
5. 老人保健施設「ニコニコ銘水苑」(平成5年12月オープン) ・入所定員は100名。ショートステイとデイケアサービスを行う
6. ニコニコ食事センター(平成5年12月オープン) ・「ニコニコ銘水苑」を中心に365日3食配食サービス。1日1,350円(平成10年6月現在)

図表2 ニコニコ生活村の主な施設概要



図表3 ニコニコ村の計画と関連する事業沿革

場での話が始まる。

二人は医療・福祉に近接した住宅づくりができないか考えていた。というのは、杉谷さんの心に、その頃亡くしたお母様のことが心に引っかかっていたことによる。「一人暮らしで病気がちだったが、最期には病院に行けず、孤独死という最期を迎えてしまった。そのとき、人間として尊厳を失わない最期の迎え方とは何かと考え、普段は自分のペースで生活できて、何かあった場合に医療・福祉が近くにあり、すぐに駆けつけられる……そんな生活の場が世の中に必要なのでは、と思っていた」と杉谷さんは語る。この時、一緒に話をしていた辛島先生も、同じようにお母様を亡くされて、生活と医療を密着させる場について考えていたという。

この思いを胸に、しばらくして準備活動にうつされた。

三重町で医師として働いていた辛島先生の話もあって、まず辛島先生を中心に「生活村世話人会」が平成2年6月に組織され、杉谷さんも参加することに決めた。

杉谷さん個人としては、当時、自治体の福祉部門のセクションにあって、働きたい高齢者や障害者が働ける場をつくる運動、また、障害児達も安心して遊びにいけるバスの運行の実現に携わったこともあった。

「何とかせねばと思うと、すぐに実行しないと気が済まない性分なんです。そこで、平成2年の子供の日(5/5)に退職しました。定年まであと数年だった(退職時は56歳)。そんなユメのような話は絶対に上手くいかないからバカなことはや

めた方がよい、と言ってくれる人が大勢いました」という。

とにかく思いだけで動いていた。いきあたりばったりでも絶対にやるという気持ちは常に捨てなかったニコニコ生活村の設立世話会の発足当時のパンフレット(杉谷さんから頂いたもの)をみると、メンバーが議論を重ねてつくったニコニコ生活村の構想が載せられている。

高齢者の生活と一口に言っても、独居世帯か夫婦世帯か、持病もちか健康か、あるいは寝たきりか自活可能か、など、個々の生活条件は様々考えられるが、このニコニコ生活村の構想では、住む、働く、癒す、集うなどの様々な要素があり、自分のペースの生活を維持しやすいように配慮されている。

後で触れるが、こうした機能を周辺地域と調和させた整備の仕方が特徴になっている。つまり、はじめから規模の決まった開発ありきでという土地処分主導の発想とは違い、地域と人に役に立ちながら徐々に活動を広げていくということに力点が置かれている。

こうした構想づくりにおいては「日中のまじめな会合だけでなく、仲間うちの酒飲み場でワイワイやっているときにも、いろいろな企画のヒントになる話がでた」と杉谷さんは当時を振り返っている。

この構想(図表4)で描かれた施設の大半は実現している。同時に大分県福祉生協準備会の設立などニコニコ生活村の活動の母体づくりにも係わるなど、将来の運営を考えた取り組みも並行して進められた。

世話人会は村づくりのコンセプトを生かすために各々のプロジェクトの要となったが、はじめにニコニコ診療所の設立準備にとりかかった。地元農家には用地買収の協力、役場には医療・福祉施設の設置の許可申請などを働きかけた。

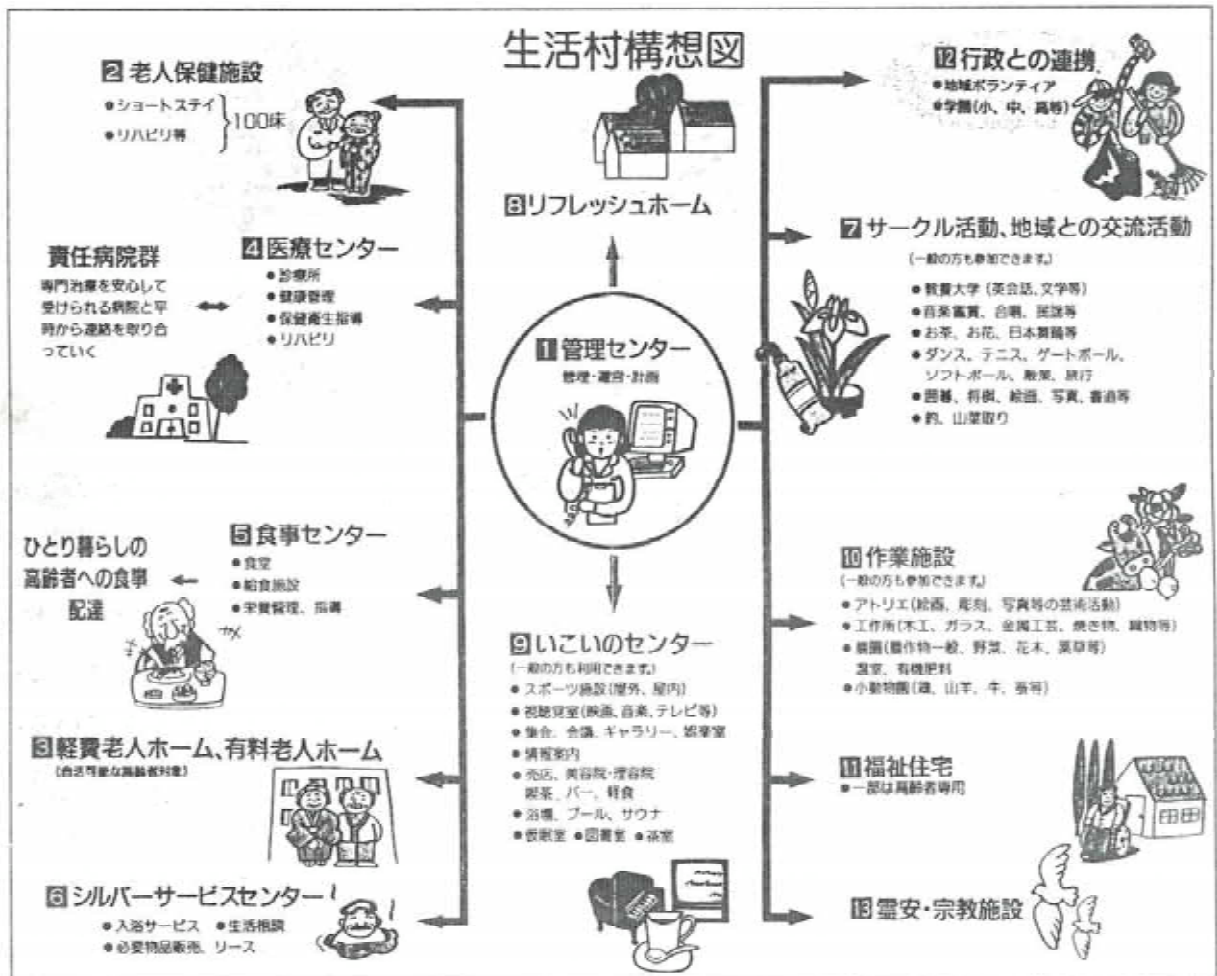
杉谷さんはこの頃から世話人会の事務局に携わることになるが、当初、単身で三重町に住み込んで、診療所の設立準備に参加していた。

「何もない状態からのスタートだったから、2～3年間は本当に無給だった。とにかくメシだけは食わせてくれ、と世話人会のメンバーに頼んで、

地権者との交渉などに走り回った。あの当時、みんながワットとした熱い思いだけで……、行き当たりばったりでも、とにかく始めようという雰囲気だった。私が後先を計算できる人間だったらやらなかったかも知れません」と杉谷さんは笑いながら語った。

開発手法が決まり、村づくりがスタートした

村全体のエリア面積は約10haである。ここは都市計画上の白地であり、開発にあたっては「ニコニコパーク」として医療・福祉施設と住宅施設を整備するという目的で、地場の建設業者（世話会にも入



図表4 構想段階のパンフレット 1、2、4、5、11などが実現

っていた)が開発許可で整備したものである。

世話人会の中で、コンセプトや個々の施設運営などソフト面と、開発や施設建設などハード面の役割分担がなされた。

医療法人ニコニコ診療所は平成3年12月に起工、平成4年8月にオープンしたが「とにかく我々にはお金がなかった」と杉谷さんは語る。建設会社に土地・建物を用意してもらい賃借契約で活動をはじめた(のち収益が増え今から3年前に買い取った)。

ちなみに今回、私が訪れたときに、診療所の裏に、まだ資金に余裕がなかった頃、ニコニコ生活村が知的障害児の活動のために、父母の会と一緒に建てたというプレハブの作業所が残っていた。今は使われていないその施設は、診療所の設立準備と同時に、知的障害者や高齢者の作業所も設置しようとしていたもので、狭かったが様々な活動ができたことで大変喜ばれたという。

最初は来る医者もなかった

名も知られていないニコニコ生活村では、出来たばかりの診療所にお医者さんを連れてくるのに最も苦労した。「今でこそ診療所も住宅も老健施設もできて、充実したような格好になったけど、当初は周りに農家が30軒ばかり建っているだけ。野生の狸も出たりして……。呼びかけて来てくれるようなお医者さんはいなかった。しかし、熱意のある人に来て欲しいという条件は妥協しなくなかった」と杉谷さん。

結局、「半年でもいいから現地をみてください」と都会の病院と連携して、リフレッシュ勤務で期限付きで呼んだことがきっかけで、定期的に医師が来るようになった。今では常駐で5名の医師が活躍するようになっている。

まず初めに地域にファンを沢山つくろうと考えた、地域に出かける健康講話のスタート

ニコニコ診療所では当初3年目の単年度黒字を



ニコニコ生活村の中の風景(福祉住宅)



ニコニコ生活村の中の風景(もとの知的障害者の作業所)

目標に営業方針を決めた。大野郡内に大きな病院がなかったものの、小さなニコニコ診療所が目目されるには、時間がかかるものと思われた。

そこで、夕方、診療所の勤務を終わったのちに、医師やスタッフが数人ずつで地域に出向いて健康講話を開くなど、PR活動をはじめた。

地域のお年寄りや、若いお医者さんが無料で健康のアドバイスをしてくれるというのでうれしい。1回あたり、どっと10~20人ほど集まるようになった。こうした活動は診療所の活動を外に広げて、地域により密着した医療を行いたいという熱意からきたものだったが、結局、これが診療所の経営を楽にした。

「講話を聞きに来る高齢者の20人に1人くらいの割合で、身体の調子が思わしくない人もいて、そうした人は診療所を使ってくれるようになった」と杉谷さん。「はじめの頃は、講話が終わった後にビールを頂いたりして土地の話や聞いた。講話というよりも選挙の個人演説会という感じだったなあ。結局、それがニコニコ村のファンとなり、いろんな形で支えてくれる人を得ることができた」

やがて、朝・夕だけ知的障害者を駅から共同作

業所まで車で送迎する役をかって出してくれる人や、農園を指導してくれる高齢者など、単に「医療行為を受ける」目的の人でなくても村づくりに参加するようになった。

この健康講話はいまも医師を中心に継続されて、これまで延べ約15,000人ものお年寄りに健康アドバイスをしている。

周囲の集落にとけ込んだ全く違和感がない開発

話を聞き終わったのち、杉谷さんに連れられてニコニコ生活村の中を歩いてみた。緑と農地に囲まれた既存の集落の中に、診療所、老人健康保健施設、食事センター、住宅などが点在している。戸建て住宅は小ぶりながらも庭が作られている。庭いじりをしたり、犬の散歩をするお年寄りの姿がみられる。実はこの分譲地に杉谷さんの御自宅もある。奥さんを数年前に呼び寄せることができ、とりあえず单身生活を終えることができた。

大規模な道路は作らず、建物はすべて2階建て以下で、周囲の民家に溶け込んでおり、一見するとどこからどこまでがニコニコ生活村なのか、農村集落との境目がはっきりしない。

医療法人ニコニコ生活村は、始めは土地も建物も持っていない状態でスタートしたが、経営が上向き中で、少しずつ建設業者の方から土地を買って事業を広げていった（土地は開発許可の関係で建設会社が一括して持っていた）。その「少しずつ型」の開発が無理なく進められているため、膨大に売れ残った造成地などもない。過大な投資ではなく、土地柄にも合っている。

一方、「どんなものになるかわからなかった」という不確実性が高い施設については、借地のままにしているところもいかにも無理がない。ニコニコ農園は借地（現況農地）で耕作したが、まともにやるとかなりの人手となったため、村としての利用だけでなく、他県の高齢者生協の菜種油の実験農場としての利用申し込みに応じるなど、今

後の活用方策が考えられている。

また、ニコニコ動物園は、羊、鶏、猪の子供などを飼って、来村者へ開放して当初喜ばれていたが、動物同士の問題、カラスや猫の侵入などが相次いで、世話にかなりの人手を要するようになり、今のところやむを得ず取り止めにしている。

今回の取材を通じて感じたのは、ここに係わってこられた人々の「思い」の大きさである。当初、辛島先生を中心に発足した世話人会で作った構想が、どれだけ大きな理想を寄せられたものか考えさせられる。そして、時間をかけて地元ファンを増やし、開発も周辺の集落に調和して進めるなど、現実性のある活動が伴ったことも大きい。

当初から世話人会の事務局に携わってこられた杉谷さんは、今でこそ温厚な紳士という感じであるが、かつてはおそらく鬼気迫るほどの迫力で仕事をされていたのではなからうか。

現在はニコニコ生活村も知られるようになって、訪れる人も多いという。昔は職員集めに苦労してきたが、今は定期的に採用できるようになっている。「昔の苦労を知らない人も多くなってきた」と嘆くのは創業者ゆえの悩みなのか。

最近の関心は、九州の各地で医療と住宅を結び付ける試みが行われていることだという。杉谷さんのもとにコンセプトや仕掛け方について相談が寄せられるようになっている。こうした問い合わせに対し、直接、出向いて地域のニーズに合った開発を勧めることで、土地の人達との交流があるのが楽しみという。いろいろな形でできるだけ他所のお役にも立ちたいという言葉に、今後の新しい挑戦や展開がうかがえる。